



愛川ふれあいの村 今月の風景

# 2020年10月 自然のたより

9月に続いて10月も、村の自然に新たな仲間が加わりました。自然観察会の下見時にマヤランを見つけました。マヤランが出たということは、地中の菌類が活発になっているということなのではないでしょうか。確かにたくさんのキノコにも出会えました。毎年同じ場所で咲くツリフネソウや山野草園の花々。寒くなりましたが、カマキリやバッタ、コオロギたちもいまだに健在です。落ちている木の实を見ると、秋が深まっていくことを感じ取ることができます。(石川)



マヤラン



ハツタケ



カキノミタケ



ツリフネソウ



トチの実



カワムラフウセンタケ



アサギマダラ



クサギの実



ウラナミシジミ



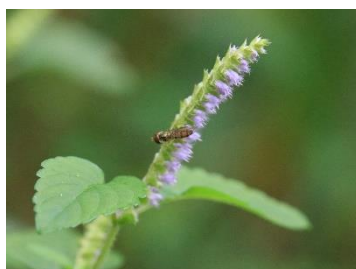
コシオガマ



キツネノロウソク



ホトトギス



ナギナタコウジュ



イカル



サラシナショウマ

## トピックス ★カリンの実★

村内を散策すると、緑から黄色に色付いた沢山の果実が、折からの台風で落ちているのを見つけました。見た目よりもずっしりと重い、カリンの実です。

中国原産でバラ科のこの果実は、落下しても踏まれても割れないくらい固く、味は酸味(渋み)が強いため生食には向いていませんが、昔から砂糖漬けや果実酒、薬用に使用されてきたようです。

最近では、のど飴などでその名前を目にすることも多いと思います。

黄色く熟した実からは、非常にさわやかな香りがして、自然の芳香剤さながらです。

実の成っている木を見ると、葉がほとんど落ちて、果実だけが取り残された寂しい印象を受けました。樹皮を見ると鱗片状で、こちらも特徴的です。

実は昨年、とある公園でこの果実を見つけたとき、その芳香に心ときめきつつも、何の実だか分からずにネットで検索した記憶があります。カリンだと分かり、ワクワクしながら果実酒を作って、まさに今、その琥珀色を楽しんでいるところです。

実りの秋。村ではカリンの他にも、カキや銀杏が秋に彩りを添えています。

みなさんも、身近な秋を味覚から感じてみてはいかがでしょうか。(袖山)



## 生き物 ★モズ(百舌鳥)★

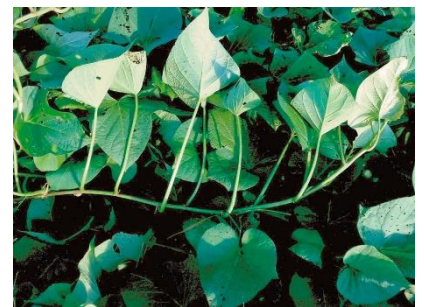
愛川ふれあいの村ではほぼ一年中観察出来るモズ、俳句では秋の季語として多くの歌に詠まれています。一般的には秋、人里近くに現れ樹の上で尾を振りながら「キーツ、キーツ」とか「キチキチキチ、デュッデュッ」と鋭い声で鳴く姿を見つめることが出来ます。秋から冬にかけてそこで暮らす縄張り宣言です。性格は荒く、カエルや昆虫はもちろん小鳥なども捕まえて食べます。そのため全長 20 cm くらいの小鳥ですが、小さな猛禽類と呼ばれたりします。また、モズのはやにえ(早贄)もよく知られています。捕まえた虫などをその場で食べずにカラタチなどの木のとげや有刺鉄線などに突き刺しておく習性です。まるで干物を作っているみたいです。オスだけに見られ、繁殖期に向けての保存食と考えられています。(高梨)



## 旬 ★さつまいの葉柄★

秋の味覚のさつまいづくりは4月の畝造り、5月の苗植え、7月の草刈り。手塩にかけたさつまいが収穫の時を迎えている。

芋掘りの時の楽しみの1つが葉柄の収穫だ。皮をむいた葉柄で作るキンピラはなかなかうまい。だが一般にはほとんど知られていないため、試食してもらっても原材料が何であるかほとんど当てられたことがない。しかし高知県では、芋は二の次で葉柄を野菜として収穫するテレビニュースを見た。店でも販売しているそうだ。南九州育ちで子どもの頃から食べていた私は、さもありなんと受け止めている。(河野)



来月の見どころ

### 冬を迎えるツチイナゴ

真夏日や猛暑日の多かった夏が過ぎ、秋の兆しが見えてきた。晴れ渡った空に向かって、ススキの穂が伸び秋風に揺れている。時おり大きく揺れるススキの穂を見ていると、茎にバツタが止まっているのが見えた。バツタはこのこと上の方まで登り、辺りをうかがっていた。白いススキの穂が青空の中に溶け込み、バツタはさも気持ちよさそうにススキと共にいつまでも風に揺れていた。

よく見ると、複眼の下に涙を流したような黒い筋のあるツチイナゴだった。これから寒い冬が来るというのにのんびりしているなと思うが、ツチイナゴは他のバツタと違って成虫で越冬するのである。天気の良い日はこうして活動をしているが、体長五〜六センチのツチイナゴにとって越冬生活は苦労も多く凍死してしまうこともある。それでも成虫越冬を選択したツチイナゴには何か違った生き方があるのだらうと思った。

こうして高い所に登るのも、食草のクズやカナムグラのある場所を探したり、危険な所は無いかなど冬越しの場所を細かくチェックしているのかもしれない。小さな生き物たちが工夫しながら生きていく姿を是非観察してほしい。(吉田)

